

森鷗外の「高瀬舟」と外国文学

MORI OGAI'S "TAKASEBUNE" AND FOREIGN LITERATURE

張 小 玲*

In "TaKasebune Engi" ("The Origin of 'Takasebune'"), Mori Ogai himself described how he came to write his short story, "Takasebune" ("The Boat on the River Takase"), set in the Edo period. He claims that his interest was sparked by the two issues of contentment and euthanasia touched on in an extra printed page of a manuscript being revised by Ikebe Yoshikata that he happened to glance at, and thereupon he began to write "Takasebune." The majority of Japanese literary critics have relied on this statement by Ogai as the single piece of trustworthy evidence available in their studies of "Takasebune."

In fact, however, we can discover a number of intrinsic connections between the issues of contentment treated in "Takasebune" and the short story "Eriling" ("Fuyu no O" - "The King of Winter") by H. Land, which Ogai translated in January of Meiji 45 (1912), prior to writing "Takasebune." In addition, he also translated

*CHANG Xiao Ling 甲南女子大学大学院博士課程。山西大学卒業。岡山大学大学院修士課程卒業。論文に「森鷗外の『雁』における偶然の役割」がある。

T. Kroger's "Sokrates Tod" ("The Death of Socrates"), which deals with a kind of euthanasia, about ten years before he wrote "Takase bune," and thus it is clear that he was already thinking about that issue as well.

"ERLING" is the story of Erling who, after five years in prison, makes a winter journey to an uninhabited island. Erling remains there for 25 years as the "King of winter," living a peaceful, solitary life, enjoying his lot of freedom. The narrator admires Erling, who has already reached a state of spiritual awakening, and he "unconsciously pays homage to him." The narrator's esteem for Erling's satisfaction with his life corresponds to the respect that the policeman Shohei feels for the contented figure of Kisuke, who is being taken off to jail, in "Takasebune."

"Sokrates Tod" is about a painter who, having gone blind, gives up on life. His close friend, a physician, makes up a dose of poison for him. The painter takes the poison and ends his life as his friend the doctor reads him a passage from the Bible. We can compare the doctor who assists in the painter's suicide to Kisuke in "Takasebune;" the painter is the counterpart of Kisuke's brother.

I happened to discover a work entitled "LoLi" in a collection of poetry by the Tang dynasty literatus Hanyu. This poem was written when Hanyu, demoted as a result of having angered the emperor with his "Discourse on the Remains of the Buddha," was being sent to Chao state. Hanyu's masterpiece takes the form of a dialogue between a criminal and the bureaucrat LoLi as they are being transported in a boat down the swift current of the

Lo River. The prisoner asks LoLi what Chao state is like and LoLi tells him about poisonous miasmas in terrifying mountain streams and the frightening thunder. The prisoner replies, "however far away Chao state may be, it is not so horrible that one cannot live there. To me, it is a blessing." His attitude compares to that of Kisuke as he's being taken off to jail. We might even infer that Ogai felt similarly when he was transferred to Ogura. "Takasebune" is thus not only a work about peace of mind and euthanasia, but conceals within it something larger and more profound.

—

「高瀬舟」は大正4年12月5日脱稿し、翌年1月の「中央公論」に発表された。この小説がいかにして成立したのかは、鷗外が「高瀬舟縁起」でその素材が神沢貞幹の随筆集「翁草」にある事を明らかにしている。

此話は翁草に出てゐる。池邊義象さんの校訂した活字本で一ペエジ餘に書いてある。私はこれを讀んで、其中に二つの大きい問題が含まれてゐると思つた。一つは財産と云ふものの觀念である。錢を持つたことのない人の錢を持つた喜は、錢の多少には關せない。人の欲には限がないから、錢を持つて見ると、いくらあればよいといふ限界は見出されないのである。二百文を財産として喜んだのが面白い。今一つは死に掛かつてゐて死なれずに苦しんでゐる人を、死なせて遣ると云ふ事である。人を死なせて遣れば、即ち殺すと云ふことになる。

(岩波書店「鷗外全集」16卷P. 237)

鷗外自身がそう述べているにもかかわらず實際、安樂死の問題に深い関心を示したのは「高瀬舟」が発表された大正5年よりかなり以前からであつた。ま

た、財産の観念即ち知足の問題も、「高瀬舟」より前にすでに心を引かれていたのである。それは、「高瀬舟」より約十年前の明治39年に翻訳され、41年1月号の「心の花」に発表されたクレーゲルの作「ソクラテスの死」を挙げることができるし、また「高瀬舟」の創作に先だつこと数年前の明治45年1月にランドの「冬の王」という翻訳小説を挙げることができる。

ランド (HANS. LAND) の「冬の王」では、作者と思われる一人の小説家がデンマークの海岸に避暑に赴き、そこでエルリングという「体格の立派」な、「傲然としてゐる」靴みがきの男に会う。小説家はエルリングの風采、態度、とくにその瞳に異常な関心を抱き、不思議だと疑問に思い、次第にその正体を探知したくなる。

初めてエルリングに会った小説家は自分の気持をこのように語っている。

己はいつまでもエルリングの事を忘れる事が出来なかつた。あの男のどこが、こんなに己の注意を惹いたのだから、己の部屋に這入つてゐた時間が餘り短かつたので、なんとも判断しにくい。目は青くて、妙な表情をしてゐた。なんでもずっと遠くにある物を見てゐるかと思ふ様に、空を見てゐた。悲しげな目といふでもない。真面目な、ごく真面目な目で、譬へば最も静かな、最も神聖な最も世と懸隔してゐる寂しさのやうだとも云ひたい目であつた。さうだ。あの男は不思議に寂しげな目をしてゐた。

(岩波書店「鷗外全集」第10巻P. 23)

この小説家がエルリングに対する「不思議」な気持ちは、鷗外の作品「高瀬舟」の中の同心庄兵衛にも認められる。

夜の高瀬舟に坐っていて、島に送られる喜助は「横にならうともせず、雲の濃淡に従つて、光の増したり減じたりする目を仰いで、黙つてゐる。其額は晴やかで、目には微かなかがやきがある。」「庄兵衛はまともには見てゐぬが、始終喜助の顔から目を離さずにゐる。そして不思議だ、不思議だと、心の内で繰り返してゐる。」(岩波書店「鷗外全集」第16巻P. 225)

両者を比較してみると、「冬の王」の小説家の「不思議」と「高瀬舟」の同

心庄兵衛の「不思議」とは、いずれも相手に対して、ひそかな敬意が含まれていることが分ってくる。その敬意とは、両者とも相手の落ち着いて、悟った世界に安住する知足から生じたに違いない。

「冬の王」のエルリングは、三十年前に自分の妻と通じた男を殺した前科者で、徴役五年の刑期を終えてから、この海岸に来て、すでに二十五年も住みついている。ここは夏だけの避暑地で、冬の長い七ヶ月は、全く無人の境と化すが、エルリングは夏は靴みがきなどの雑用をして働き、冬になると、孤独な生活に安住して、所謂「冬の王」の静かで自由な境涯を楽しんでいる。小説家は、エルリングのすでに深い悟りに入っている心境に感服せずにはいられなかった。ある真夜中のこと、エルリングの明るい窓に引かれて、小説家はついに彼を訪問する。

「心持の好きさうな住まいだね。」

「えい。」

「冬の間に誰か尋ねて来るかね。」

「あの男だけです。」

エルリングが指さしをする方を見ると、祭服を着けた司祭の肖像が卓の上に懸かつてゐる。

.....

「冬になったら、此邊は早く暗くなるだらうね。」

「三時半位です。」

「早く寝るかね。」

「いいえ、随分長く起きてゐます。」

.....

「あれはなんだね。」

「判決文です」エルリングはかう云つて、目を大きく睜つて、落ち着いた氣色で己を見た。

「どう云ふ文句かね。」

「殺人犯で、懲役五箇年です。」緩やかな、力の這入った詞で、真面な、憂愁を帯びた目を、怯れ氣もなく、大きく睜つて、己を見ながら、かう云つた。

.....

「そのお上さんになる筈の女はどうなつたかね。」

エルリングは異様な手附きをして、窓を指さした。その背後は海である。

「行つてしまつたのです。移住したのです。行方不明です。」

「それは余程前の事かね。」

「さやう。もう三十年程になります。」

エルリングは昂然として戸口を出て行くので、己も附いて出た。戸の外で己は握手して覚えず丁寧に禮をした。

(岩波書店「鷗外全集」第10巻P. 29～31)

この小説家がエルリングに対して、最初の「不思議」から、最後の敬意を抱いて丁寧に礼をするに至ったのは、やはりエルリングのこの世に安住する姿と知足の精神に感服させられたゆえである。即ち、最初の「不思議」にひそかに潜んでいた「敬意」は、表面にはっきり表われてきたという心理過程である。この点は「高瀬舟」の場合も同様だと思う。

犯人喜助の喜んで流人の島に行くわけを聞いた同心庄兵衛は「只漠然と、人の一生といふやうな事を思つて見た。人は身に病があると、此病がなかつたらと思ふ。其日其日の食がないと、食つて行かれたらと思ふ。萬一の時に備へる蓄がないと、少しでも蓄があつたらと思ふ。蓄があつても、又其蓄がもつと多かつたらと思ふ。此の如くに先から先へと考て見れば、人はどこまで往つて踏み止まることが出来るものやら分らない。それを今日の前で踏み止まつて見せてくれるのが此喜助だと、庄兵衛は氣が附いた。」(岩波書店「鷗外全集」第16巻P. 230)

いろいろな考えに耽けた庄兵衛は「今さらのやうに驚異の目を睜つて喜助を見た。此時庄兵衛は空を仰いでゐる喜助の頭から毫光がさすやうに思つた。庄

兵衛は喜助の顔をまもりつつ又『喜助さん』と呼び掛けた。今度は『さん』と云つたが、これは十分の意識を以て稱呼を改めたわけではない。」（岩波書店『鷗外全集』第16巻P.230）

このように、同心庄兵衛がついに犯人の喜助を「喜助さん」と呼んだのは、言うまでもなく、喜助の知足に感動し、かのエルリングと「握手して覚えず丁寧に禮をした」小説家と同様だと言えよう。最初庄兵衛の「不思議」に隠されていた敬意は、ここに至って、ようやく表われてきた。この心理過程も「冬の王」の小説家と一致していると思う。

「冬の王」では、最後にエルリングの冬の生活を思い浮べて、「暴風が起つて、海が荒れて、波濤があの小家を撃ち、庭の木々が軋めく時、沖を過ぎる舟の中の、心細い舟人はエルリングの家の窓から洩れる、小さい燈の光を慕はしく思つて見て通ることであらう」と人生の燈台をも暗示するよな意味深い表現で結んでいる。同じように、「高瀬舟」の終りも、喜助に深い意味を寓している。人間は足ることを知らないものであるが、どこまでも欲望を踏み止めることのできない人々は、喜助の考えと対し、どのように思うだろうかと読者に永遠の課題を残している。

以上のように比較してみると、「冬の王」の小説家とエルリングとは「高瀬舟」の庄兵衛と喜助に相応しているとも言え、また表現にも類似する点がある。直接的な影響関係はないとしても、鷗外が数多く読んだ外国小説の中から特に「冬の王」を選んで訳したことは、こうした宗教的とも言える悟りに対して、彼が早くから深い関心を抱いていたからであり、この関心が後年「翁草」を読んで、「高瀬舟」における喜助の知足の心境を描くに至ったとは言えるであろう。即ち「冬の王」と「高瀬舟」とは鷗外の心において相通じるものがあり、それは鷗外自身の内的な問題であったことを一つは翻訳で、一つは創作で表出したと言っても差支えないと思う。

二

「ソクラテスの死」は「高瀬舟」より十年前も翻訳され、明治41年1月号の「心の花」に発表された短篇である。

名高い画家が両眼を失明し、色も光りも見ることができなくなり、勿論生涯再び画を描く事も不可能になったので、人生に対して絶望している。この画家の最後に描いた画が「ソクラテスの死」と題する画で、この画は失明の画家の寝台のそばに置かれてあって、その画中の哲人は、自己を制作はしたものの、今はすでに自己を見ることも出来ぬ画家を見おろしている。失明した画家の親友である主治医キルヘルムは心を尽くして、画家を慰めるが、終生画を描く事出来ぬ画家は生きる望みを失ってしまう。

僕は無用の人物だ。何と思つても、もう繪を書く事は出来ぬ。これは確乎たる事實で、それを何とごまかしやうもない。僕は、光と色とに対する飢渴を持つてゐる。其光と色を今は奪はれてしまつたのだ。世界が僕の為にはつまらなくなつてしまつた。

(岩波書店「鷗外全集」第3巻P.377)

と友人に言う。しばらくして、画家は「友人の手を堅く力を込めて握つて、口のまはりに一種の熱心な希望の表情を見せた。さらばだよ。そこで君の外には僕の末路に手を貸して呉れる者はないのだ。キルヘルム、どうぞ君の手を貸して呉れ」と切に頼む。

この失明した画家の内心から出てきた悲鳴は、はからずも「高瀬舟」の中の弟のことを連想させる。

死にそこなつた弟は外から帰ってきた兄に「濟まない。どうぞ堪忍してくれ。どうせなほりさうにもない病氣だから、早く死んで少しでも兄きに樂がさせたいと思った。笛を切つたら、すぐ死ねるだらうと思つたが、息がそこから漏れただけで死ねない。」「これを旨く抜いてくれたら己は死ねるだらうと思つてゐる。」「どうぞ手を借して抜いてくれ。」

(岩波書店「鷗外全集」第16巻P.232)

この病氣にかかった弟も、失明した画家も生きている現実世界からの解脱を求めるため、最も親しい人の力を借りたがったのである。

画家に頼まれた主治医キルヘルムは胸の中には生は何であろうか。死は何であろうかと繰り返して考えている。人体は神の小さい祠であるという教えを思ひ浮べる。しかし人間が生まれた時から持っている自由という事をも考える。ついに、求められた薬を盤の上に置き、「君の呉れと言つたのはこれだ。これを如何にするかは君の自由意志に一任する。」と言う。こうして医師は、自ら薬を飲んだ画家に、聖書の一章を読み聞かせているうちに、画家は静かに生を終った。画家の死後「医師の眼には、画面の上に、死者の背後に、別に一人の人物が見えるやうに思はれた。併しそれはたゞの影であつた。併しその影は死せる哲人の面の上に両手を掩うてゐるやうに見えた。そして医師の顔を見て笑ふやうに見えた」とあって、医師の処置に対する死者の満足を医師は感じつつ静かに戸外に出て行くところで終っている。

死んだ画家のこの感謝の気持ちは、同じく「高瀬舟」の場合にも表われている。

死ねずに苦しんでいる弟を見て、喜助は「しかたがない、抜いて遣るぞ」と言ったら、「すると弟の目の色がからりと變つて、晴やかに、さも嬉しうになりました。」

このように「ソクラテスの死」にあつては自殺を手伝った医師は「高瀬舟」では喜助に、安楽死を望んだ画家は喜助の弟になぞらえる事も出来るのであつて、鷗外がこのような「ソクラテスの死」を彼の読んだ多くの外国小説の中から選出して、翻訳したのは、安楽死というような問題が早くから彼の関心事であつたためである。実際、鷗外自身の家庭においても、こういう出来事を生じていて、彼に迫つた事もあつたのである。これについて、鷗外の次女杏奴の「晩年の父」に詳しく記されている。「高瀬舟」の創作より約九年前の明治41年2月、前年に生れた次男不律が百日咳で死亡した後、その姉の茉莉が同病で瀕死の際に生じたのである。

其の時某氏は姉の命がもう廿四時間である事を宣告し、死ぬにしても甚だしい苦痛が伴ふのであるから、むしろ注射をして樂に死なせたらどうだろうか。モルヒネを注射すれば十分間で絶命すると云はれ、父に計るところがあった。

父も其の氣になつて、母に其の事を云つて聞かせたので、母も父が云ふままにさうするやうな氣持になつて、既う注射するばかりになつてゐるところへ母の實家の父が見舞いに來た。

母は祖父に「既う茉莉はとても助かる見込はないので、某さんが注射して下さるさうです」と話すと、祖父は眼を洞穴のやうにして大聲で「馬鹿な」と云ふより大變なけんまくで「人間は天から授つた命と云ふものがある。天命が自然に盡きる迄は例へどんな事があらうとも生かしておかなくてはならない。私も子供を三人まで既う駄目だと醫者に見放された事があつたが、三人共立派に助かつて生きてゐるじゃないか」と斷然注射を行ふ事を退けさせた。（中略）その後、容態が變つて姉はずんずん快くなつて行つた。

だから姉の命は全く明舟町の祖父の爲に救はれたと言つてもよいので、實に命の恩人であつた。（小堀杏奴「晩年の父」P. 237 ～238）

こういふことで、鷗外は自己の家庭に生じた愛児の瀕死の際の出来事から安樂死の問題を更に深刻に考えたに違いない。ところが鷗外が「翁草」を読むよりかなり以前から安樂死に関心を抱いていたにもかかわらず、当時この問題について、書かなかつたのは何故であろう。これはおそらく安樂死という医学上の問題を小説にしても、当時の日本においては、時期尚早であつたからに違いない。したがって、何かを創作するよりも、まず外国人の作を翻訳して、紹介する方が、都合のいいことであつたろう。十数年のあと、たまたま「翁草」の一篇を読んで、日本の昔の話にも安樂死に触れたことがあると分つて、ようやく今までの考えを「高瀬舟」に書き表わしたと言えよう。

三

中国唐の時代の韓昌黎（愈）は、詩人として、昔から日本人に親しまれたが、彼は儒教の護道者としても有名である。

元和14年（819）韓愈五十二歳にあたる年に、唐憲宗は勅命をもって、長安の西方にある法門寺に収めた仏骨を迎えるよう命じ王公から庶民に至るまで、来世の至福を祈り、喜捨をしすぎて破産する者さえ出た。儒教の道を守ろうとする韓愈がただちに長文の建白書「仏骨を論ずる表」を書いて奉呈した。

その要点は二つにまとめることができると思う。その一つは、仏教が中国に入る以前、上古の帝王たちはすべて長命であった。六朝になり、仏教への信仰が広まるにつれ、王朝や帝王の寿命は短くなっている。「此に由りて、これを観れば、仏の事ふるに足らざること、亦知る可し」。その二は、「夫れ仏は本夷狄^{いてき}の人、中国と言語通ぜず、衣服は製を殊にす。君臣の義、父子の情を知らず。」かりに釈迦が今の世に生きていて、中国に来朝したとすれば、陛下は下賜品を与えて、本国へ送り返す処置をとられるだけのことであろう。まして彼は久しい前に死んでいる。その骨を水火の中に投じ、迷信の根本を絶つべきである。「仏に如し靈有って、能く禍崇^{くわすい}を作さば、凡有る殃咎^{あうこう}は宜しく臣が身に加ふべし。上天鑒臨^{かんりん}したまふ。臣、怨悔^{おんくわい}せじ」（前野直彬「韓愈の生涯」を参考）韓愈の決意は実に堅い。ところが、この表を読んだ憲宗は激怒して、韓愈を死刑にせよと命じた。後に、宰相裴度^{ひど}の弁護によって、潮州への配流になり、その途中で、韓愈は「瀧吏」という大作を書いて後世に残した。

「瀧吏」の全篇は、朝廷罪人の「私」と舟の護守をしている地方の役人「瀧吏」とが舟で問答することによって成り立っている。

潮州はいったいどういう所だろうと「私」が聞いたら、「瀧吏」は次のように答えた。

下此三千里 有州始名潮。

惡溪瘴毒聚 雷電常洶洶。

鱷魚大於船 牙眼恢殺儂。

州南数十里 有海無天地。

颶風有時作 掀簸真差事。

ここから川を下って三千里進むと、ようやく潮と名づける州がある。恐しい谷川に瘴癘の毒気がむらがり、雷がいつもおどろおどろと鳴っている。船より大きいワニザメがいて、ふるえあがらせるような牙と眼をむき出す。州の南方は数十里にわたって、ただ一面の海があるだけ、天も地も見えない。そこに大風がときどき起って、ふるい動かすように波立たせるありさまは、まったく大変なことだと恐しいことばかり教えるが、つづいて口調がすこし変って、慰めでもしてくれるようになった。

聖人於天下 於物無所容。

此聞此州囚 亦有生還儂。

官無嫌此州 固罪人所従。

そんな場所でも、聖天子の治める土地の内には違いない。流された罪人の中には、生きて帰れる者もあるという。あなたも罪を犯したからは、文句を言わずに潮州へ行きなさい。そう告げてから「瀧吏」はさらに言葉を続ける。

官何不自量 満溢以取斯。

工農雖小人 事業各有守。

不知官在朝 有益国家不。

得無風其間 不武亦不文。

仁義飾其躬 巧姦敗群倫。

あなたは自分の適量を考えず、水を溢れさせてこんな目に会ったのではないか。工人や農夫は身分の低い者だが、それぞれに本分とする仕事を持っている。いったいあなたは朝廷にいたとき、国家のお役に立ったのか。しらみのように朝廷に巣くって、武でもなく文でもなく、仁義でわが身を飾りながら、陰謀をめぐらして同僚たちを害することがなかったと言えるか。

この言葉に対し、「私」は叩頭して答えた。

歴官二十余 国恩並未酬。

凡吏之所訶 嗟実頗有之。

.....

潮州雖云遠 雖惡不可過。

於身実已多 敢不持自賀。

二十年あまり役人暮らしをしてきたが、国家の恩には一向に報いていない。総じてあなたに叱られた点は、たしかに、かなりそのようなことがあったと認める。潮州がいくら遠くても、住めないほどひどい所だとしても、自分にとっては、もう十分にありがたいことなのだ。これをめでたいことと思いこまなくてはなるまい。

一読すると、作者韓愈の謝罪文めいた感があるけれども、実は、韓愈の謝罪とは、けっして、「仏骨を論ずる表」を奉呈した罪を謝るわけではなく、在朝二十余年国に何も役に立てなかったことを反省しているのである。鷗外は「瀧吏」を読んだかどうかは分らないが「文において、八代の衰を振起した」唐宋八大家の一家である韓愈の詩文に鷗外がぜんぜん触れたこともないとは考えられない。韓愈の詩文と生涯を学んでいるうちに、鷗外の生涯には、それと似通っている所が案外多いことに気づいた。高位の出身でもなく、学問を熱心に治めたゆえに、ようやく官界に入ったこと、役人生活でいろいろな不満があって、なかなか昇進できなかったこと、激しい性格のゆえに、上司の機嫌を損じ、左遷のうき目にあったこと、最後に、自分の分野でトップの地位にまで登りついたことなど、両者の人生航路がほぼ同じだと言えよう。特に鷗外の小倉左遷には、韓愈の潮州配流と一致するものが存在すると思われる。

鷗外の小倉左遷の理由として、よくあげられることは二つある。一つは、鷗外が陸軍軍医としての無能であった。換言すれば、本職をいい加減にして、文学活動を行っていたことである。なお、部下の能力判断に違った方針を持っていた。つまり部下がドイツの文豪シルレルの書いたものをよく読めるか否かによったことである。ところが私の考えでは、小倉左遷のもっと大きな理由はドイツ留学から帰国後の文学の面における活動よりも、医学ならびに医事行政の

面における啓蒙的論争の過程において、医界のボスたちを徹底的批判したことでなかったろうか。ここでは有名な「傍観機関論争」を取りあげたいと思う。

明治26年5月から、27年8月にかけて、鷗外は十六ヵ月にわたって、大量の論文を「衛生療病志」に出して「傍観機関論争」を行った。その主な内容は、明治23年東京で開かれた日本医学会が真の学会とはいいがたい構成と運営であることに対する痛烈な批判である。その一例を「反動祭」に見てみよう。

反動祭とは何ぞや。第一回及び第二回日本醫學會是なり。諸高等醫史、大学諸教授、諸醫學博士を始として、国内幾千の醫は、此會に臨みたり。
(中略) 然りと雖も、余們其皮を剥ぎて、其一種の教育會に過ぎざることを認め、其肉を削りて、其まぎれもなき反動祭なることを知る。

日本醫學會は、當初乙西會の起すところにして、そのデクタツウルdictaturめきたる創立趣意といふものを受け、醫者輩は受聘者として之に臨み、乙西會員たる發起人の指圖に従ひて講説し、會員は應募者として之に臨み、乙西會員たる發起人の指圖に従ひて聴聞したれば、其性質乙西會の隸屬たるに過ぎざりき。(略)

余們は唯かの老策士が學問の理想界に侵入して、第一回日本醫學會の發起人となり、歐洲の學者を默聴する參與者Theilnehmerたるべき資格だになきものを募りて會員となし、意氣地なき學者を雇來り、又時勢に通ぜざる學者を誘出して私立学校の教師めきたる役をつとめしめ、かく組織したる教育會に學者の名を僭稱せしめたるを以て、妥ならずとなすのみ。(岩波戦後版「鷗外全集著作篇」第26卷P. 170 ~172)

これを読むと、鷗外の氣にさわったのは、真の医学者というに値しない医界のボス達が日本医学会の名の下に全国の医者を集めただけでなく、真の学者までこれに隸屬させようとしたことである。この医学会を牛耳るものは乙西會といわれるボスの集団であるが、その中に鷗外の直屬長官に当る橋本綱常や石黒忠憲など陸軍省医務局の先輩が含まれていたもので、やっかいなことになった。この意味で鷗外の医学方面における啓蒙論争は大冒険であり、それ相應のイン

パクトがやがてはね返ってくるを覚悟したはずである。これから、「吏たる學者」に見てみよう。

醫學者は技術者なり。醫學者にして吏たるものは技術官なり。醫吏にして學問あらば何の地位か與ふべからざらん。醫吏にして學問なくば、是れ啻に醫たるの名に負くのみならずして、亦吏たるの職をみだるものなり。

(略)

余們は技術官中、俗吏の重ぜらるるを傍觀すること久し、今や反動の風潮は次第に盛になりぬ。官長たるもの、或はこれに捲き込まれて、愈多く斗筭の俗吏を挙げ、理に逆ひておのれを危うすることなきか。

ここにいわゆる「官長」とは「舞姫」に出てくる用語であり、「舞姫」における「官長」のモデルが石黒であることは一般に承認されている事実である。恐らくこの「官長」も亦暗に石黒を指しているものと想定して誤りあるまい。(吉野俊彦氏の説を参考)ところが、このようにたび重なる批判を加えられては、石黒が鷗外に対して強い不満を抱くに至るのは自然の成行であり、これが鷗外の小倉左遷の最大の原因となった。

以上鷗外の激しい啓蒙活動について論じたが、ここから鷗外の小倉左遷の原因及び韓愈の潮州配流の理由について、ちょっとまとめたいと思う。

まず、韓愈にせよ、鷗外にせよ、いずれも仕事上の過失でなく、むしろ口から出た禍いで、いわゆる「口禍」である。それは官僚としてのタブーとは誰でも分っていながらも、不思議なのは、官僚社会では口によって、禍いを遭けた例は少なくないことである。また鷗外と韓愈とは、いずれもおのおのの文章に正義感と進歩性が溢れている。そもそも、二人の正義感は強い責任感から生じ、その進歩性は豊かな学識を源とする。韓愈の古今に通ずることは言うまでもない。鷗外のドイツ留学の経験は彼をある面で明治社会より一步前に進ませたに違いない。にもかかわらず、両者とも左遷されたのは、どう考えても、その激しい性格による以外にないのである。過激な態度によって、トラブルを起こしたのである。韓愈の「仏骨を論ずる表」を読んで、激怒した憲宗は、「朕が仏

教を信仰しすぎるといふ意見だけなら、まだよい。仏教が中国に伝来してから帝王がみな短命になったとは、人臣たる者の口にすべき言葉だと思うか。」と宰相たちに言った。仏教伝来以降、中国の帝王たちの寿命が短くなったのは事実かもしれないがしかし、皇帝の前に何よりも不気味なことを言うのはやはり凶の多く吉の少ないことであろう。とは言え、ここからも韓愈の「狂直」と「愚忠」が十分に窺える。一方、鷗外の場合は、その大量の論文では、諷刺したり、嘲笑したりして、上司の耳に逆らうのは当然のことである。ところが二人の間に違うところも存在する。韓愈は火に燃えるほどの「仏骨を論ずる表」を奉呈した歳は、五十二才という当時としては高齢で、その上に「兵部侍郎」という現在の「法務次官」の高位であったが、鷗外の啓蒙活動に身を投じたときはただ留学から帰国したばかりの若者であった。年齢と地位の差から考えると、おそらく、韓愈の本来の性は鷗外よりずいぶん激しかったに違いない。

鷗外の小倉に赴任する際の心持については本人の自紀材料（日記）には何も書いていないから、今までわりあい信用できると思われた資料は、鷗外の長男森於菟の「父親としての鷗外」に書かれた一節しかない。

明治32年6月8日、小倉に転任する辞令を受け取った鷗外は、怒りの余り、役人を止めようとさえも考えたが、友人賀古鶴所のアドバイスを聞き、相手の壺にはまらないように、やっと小倉の任地に出発したということである。これはあくまでも、子供がその後家族の人々から聞いたことで、鷗外自身から直接聞いたことではない。ところが、小倉以来十七年も後に書かれた「高瀬舟」の中に、島に送られる喜助の話しから、私は小倉に赴任した鷗外の心境が窺えるような気がする。

島はよしやつらい所でも、鬼の栖む所ではございますまい。わたくしはこれまで、どこと云つて自分のゐて好い所と云ふものがございませんでした。

.....

それがお牢へ這入つてからは、為事をせずには食べさせて戴きます。わたくしはそればかりでも、お上に対して済まない事をいたしてゐるやうでなり

ませぬ。（岩波書店・「鷗外全集」第16巻P. 227）

この話を鷗外のほうに移すと、小倉は東京ほど住みなれた所ではないけれども、鬼の住んでいる所でもないから、行けと言われたら、行けばいい。ただ国に何も役に立てなかったことは残念である。この喜助の言葉に托した鷗外の考えは、ほかのものでなく、ちょうど「瀧吏」に表われた「二十年あまりも役人暮らしをしてきたが国の恩には一向に報いていない。潮州がいくら住めないほどひどい所だとしても、自分にとってはもう十分にありがたいのだ」という韓愈の心境に通じるものではなからうか。

鷗外の長女茉莉がかつて次のように述べている。父親には「一片耿々たる皇室尊崇の念が確乎として存在」する。皇室唯尊とした鷗外にとって、貶謫されて、不満に思っていたとは言え、十年ほど役人生活を送ってきたのに皇国日本のために何も役に立たなかったことは、韓愈の如く悔しかったに違いない。

今までの評論では「高瀬舟」は典型的なテーマ小説だと批評されているが、しかしこれはすこし「高瀬舟縁起」に束縛されすぎたきらいはないであろうか。「高瀬舟」は単なるテーマ小説ではなく、すでに引退の意志を表明した晩年の鷗外が人生に対する認識と感慨が多く含まれており、小倉時代の心境も潜んでいると私には思われるのである。

参考資料

- 一、「續国譯漢文大成」・韓退之詩集下 文学部第八卷（国民文学刊行会）S. 4. 9
- 二、前野直彬「韓愈の生涯」秋山書店 S. 51. 3
- 三、吉野俊彦「青春の激情と挫折 森鷗外」PHP 研究所 1979. 8
- 四、森於菟「父親としての森鷗外」筑摩書房 1976. 5
- 五、小堀杏奴「晩年の父」岩波書店 S. 17. 8

討議要旨

長谷川泉氏より「鷗外の小倉行は左遷ではなく、参謀本部の秘密人事で、今ではこれが定説となっている。」との助言があった。

平岡敏夫氏から「『冬の王』のエルリングスと『高瀬舟』の喜助では違いがある。人物の描き方の違いに注意して、相違点も押さえないといけない。」との助言があった。